人間健康科学研究科

研究科長　殿

審　査　報　告　書

論文審査要綱第４条に基づき、下記のとおり報告します。

（報告年月日）（西暦）　　2024 年　　08 月　　08 日

論文受理番号	D2024-303	学域	作業療法科学域	申請者氏　名	北村　新

試験担当者			
	主　査	宮本　礼子	印
	副査１	小林　法一	印
	副査２	塩路　理恵子	印

（１）学位論文の内容の要旨　　別添のとおり（別紙様式３）

（２）学位論文の審査及び最終試験の結果の要旨

本研究は、脳卒中者の病後の Self-Stigma に着目し、その程度を測定可能な日本版尺度 Stroke Stigma Scale(SSS-J)を開発し、その信頼性と妥当性を検証することに主眼を置いている。

研究１「日本の作業療法研究におけるグラウンデッド・セオリー・アプローチの用いられ方とその課題」では、脳卒中者へのインタビュー調査に先立ち、分析に用いるグラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）で必要となる報告視点を、文献レビューで整理した。研究２「脳卒中片麻痺者が生活の中で麻痺手の使用・不使用にいたる過程」では、通所リハビリテーションを利用中の脳卒中片麻痺者への半構造化インタビューを実施し，研究１の成果をもとに適切な報告視点を含めた質的分析結果を整理した。その結果、脳卒中者本人が麻痺手を使用しない理由のひとつに、Self-Stigma が存在していることを見出した。現状国内に Self-Stigma を測定可能な評価が存在しなかったことから、主研究の「日本語版 Stroke Stigma Scale の開発：信頼性・妥当性の検証」に至った。SSS-J を開発することにより、Self-Stigma の程度が脳卒中者の在宅生活や社会参加に与える影響を検討可能となった。当該尺度は、これまで同様の視点の尺度が存在していなかったという点で新規性を有しており、クライエントの社会参加の支援を目指す作業療法士にとって非常に有益な情報をもたらしうるという点で社会への普及可能性も有している。

※欄が不足の場合は、二枚目に欄を増やしてご記入ください。

SSS-J の作成は, Consensus based Standards for the selection of health Measurement Instruments(COSMIN) ガイドラインに基づいて実施された。元々中国語版が原版であることから、文化的背景の相違に伴う表現の修正等には中国語話者の協力を伴い、COSMIN の評価基準に沿ってどの項目も高いレベルで質が確保されていた。研究２で見出された「self-stigma の存在が手の使用・不使用の場面を分ける」点については、その影響度を調査するには至らなかったものの、Self-Stigma の測定を可能にした功績は大きい。Stroke Impact Scale の各下位項目との間の相関分析の結果から、ADL・IADL や社会参加、コミュニケーションと Self-Stigma の間に有意な相関を見出すなど、Self-Stigma が脳卒中者の生活に影響を及ぼしうる点を明らかにできていることから、今後実証的な研究に発展できる可能性も大いに有している。

審査会では、研究上必要と判断される知識の蓄積や事前の文献調査、研究疑問の洗練といった点は非常に高い能力を持ち、研究成果を論理的に説明する能力だけでなく研究限界を見出し次なる研究につなげていく推進力・思考力を有している。これらの能力が最終試験ではいかんなく発揮され、質問への適切かつ簡潔な回答と展望を述べることができていた。今回至らなかった調査を今後行うにあたり, Self-Stigma 自体が持つデリケートな側面を考慮した対応もイメージすることができていた。

最終評価は、本学域の博士学位論文審査基準に則り以下の通り判定する。

評価項目	判定
作業療法科学の発展に寄与する内容である	○
研究目的の明確な設定とふさわしい研究方法の選択	○
研究内容の新規性と論理性、明確な結論	○
学位論文テーマに関連する主論文・副論文の公表の確定	○
取得する学位に求められる基礎学力を有する	○
学位論文に関連する研究分野とその周辺領域に関する専門知識を有する	○
英語での論文執筆や発表が可能な語学力、プレゼンスキル、疎通能力	○
研究全体を通して適切な倫理的配慮がなされている	○

結果、本論文は博士論文として適格であり、本申請者は博士（作業療法学）の学位を授与するにふさわしい知識と研究能力を備えていることから、最終試験は合格と判断する。